

会議名	第10回全国草地畜産コンクール表彰・発表会
開催日時	平成18年6月30日（金）13:00-17:00
開催場所	発明会館ホール（東京都港区虎ノ門）
主催者	社団法人 日本草地畜産種子協会
参加人数	約160名（農水省・都道府県・試験研究期間・団体・民間・受賞者等）
1. 会議の概要 （500-1000字程度または議事内容の資料添付）	<p>標記の会議に出席した。コンクールの趣旨は「自給飼料の効率的な生産と利用技術並びに環境に調和した持続的生産・経営方式等優秀な事例を広く紹介し、飼料基盤の重要性の啓発、経営の安定に資する」ことにあり、会議はコンクールと発表会、シンポジウムからなっている。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 開会挨拶（浅野会長） 2. 祝辞（農水省畜産部長、代理） 3. 審査結果の講評（萬田審査委員長） 4. 受賞者の表彰（各受賞者の概要は別記） 5. パネルディスカッション（萬田座長：進み始めた飼料増産－草地畜産コンクール受賞者に学ぶ） <p>以下に9点の各受賞者とその概要を記す</p> <p>〈農林水産大臣賞〉</p> <p>放牧部門放牧の部：鹿児島県みしま農産（有）代表 日高郷士 （島の資源を生かした和牛の放牧とゆとり経営）</p> <p>三島村硫黄島の地域資源（チガヤと琉球竹）を有効活用したところに特徴のある肉用牛繁殖経営である。成雌牛83頭を飼養し、放牧を導入することで省力を実現し、牛群の資質改善にも取り組み、平均分娩間隔12.8ヶ月、子牛販売価格419千円、粗飼料自給率97.5%、飼料自給率80%など基盤のしっかりした経営を実現している。</p> <p>〈生産局長賞〉</p> <p>●放牧部門放牧の部：北海道 大和章二 （牛と人のゆとりを実現する良質粗飼料生産と放牧酪農）</p> <p>畜舎周辺への飼料基盤の集積を図り、土壌診断、スラリー成分分析および施肥マップの採用により、合理的な施肥管理を実現し、資源循環型畜産を推進している。因みに、経産牛一頭当たり64.4aの放牧地を有し、粗飼料自給率は73.8%である。一方フリーストール・パーラー・TMR 給与方式の採用により高泌乳牛飼養経営を実現した。</p> <p>●飼料生産部門稲発酵粗飼料：大洗町水田農業担い手組合代表 清宮一美 （耕畜連携による飼料イネの安定生産）</p> <p>耕種農家と畜産農家が町域を越えて耕畜連携を実現した事例で、この担い手組合が耕種農家が栽培した飼料イネ約60haの収穫調製作業を受託し、飼料イネWCSとして</p>

供給する。関係機関の支援、連携体制、ブロックローテーションによる集团的土地利用をはかるなど、今後の飼料イネ普及定着への取り組みに示唆するものが多い。

●飼料生産部門単年生牧草の部：岡山 松崎隆

(都市化の進む中で築いた土地循環型酪農経営)

都市化が押し寄せる立地条件で、転作田、水田裏作、休耕田の裏小作などの借地により、飼料生産基盤を確保し、消費者との連携交流を積極的に推進していることにも特徴のある大型酪農である。粗飼料自給率66.7%、自給飼料生産コスト39.5円/TDNkgと低コストである。現在所得率がやや高いが施設整備は終了しており、今後収益性の向上が期待される。

〈日本草地畜産種子協会会長賞〉

●飼料生産部門飼料作物の部：長野 波多腰和寿

(地域の仲間と融和した循環型酪農の推進)

果樹、園芸作が中心の松本平でトウモロコシを中心とした借地による飼料生産基盤の拡大を背景に短期間に飼養規模を拡大した酪農経営である。飼料基盤は分散しているが、大きく区分し、区分ごとに同じ生産方式をとり、共同作業を行うなど工夫がされている。粗飼料自給率は23.7%、自給飼料生産コストは31.4円である。所得率には改善の余地が残されている。

●放牧部門放牧の部：愛媛 井関秀夫

(中山間地シバ型草地で取り組んできた和牛繁殖経営)

傾斜地の岩の多い厳しい土地条件を短草型草地へ造成し、飼料畑と併せて飼料基盤を確保し、ゆとりの創出と低コスト、高収益を実現した肉用牛繁殖経営である。5-8月の飼料自給率は45%で放牧型肉牛経営としての特徴は強いとは云えないが、分娩間隔が12ヶ月、子牛価格496千円など優れた技術内容を持っており、条件不利地域での26等規模、1000円の所得があり、高く評価される。

●飼料生産部門飼料作物の部：熊本 明石良生

(中山間地の条件不利地での飼料作物生産と肉用牛繁殖・肥育一環経営)

褐毛和種のブランド作りと低コスト繁殖肥育一貫経営であり、水田放牧、みかん廃園地へのシバ草地の造成と放牧、コントラクター利用によるラップサイレージの採用により自給率向上に努め、繁殖部門では粗飼料自給率100%を達成している。このため肥育部門の素畜費を低減している。

〈日本草地畜産種子協会会長特別賞〉

●飼料生産部門永年牧草の部：北海道 照井明

(ほ場と財布にやさしい粗飼料生産)

離農跡地の集積を進め、自給飼料生産の効率化を実現した酪農専業経営。90等規模、フリーストール、6頭ダブルのパーラー、TMR給与、乳量9859kg、飼料自給率49.8%、所得率18.9%、生産コスト60.2円のデータが得られている。

●放牧部門放牧の部：兵庫 森脇薫明

(放牧による足腰の強い但馬牛生産を目指して)

但馬の優良和牛の増頭による収益性と飼料自給率向上の目標を野草放牧地の昼夜

	<p>放牧技術の確立した肉用牛経営である。放牧によって畜舎にゆとりができ、子牛の発育が促進され、糞尿処理が軽減され、増頭ができたとし、現在74頭の成牛を飼育している。分娩間隔は11.9ヶ月、子牛の販売価格は55万円と高い。</p> <p>この後パネルディスカッションが行われた。次のような集約が行われた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 北海道における集約酪農は土地集積があればその有利性はほぼ証明されており、普及に努める段階に来ている。 2. 飼料基盤の集積による耕畜連携についてはそれぞれの地域で技術、作付け体系など条件に即して創意工夫がされている。 3. さらなる低コストかが求められており、様々な場面を利用した放牧の推進が一つの鍵になる。 4. 山地傾斜地の国土保全、立地条件に応じた野草地の保全的利用に学ぶ必要がある。 5. 繁殖牛経営では牧養力向上と併せて一年一産のための技術の追求が必要である。 6. 気象変動に応じて、高位生産だけでなく、それを避ける弾力的な独自の技術の工夫が必要である。
<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	<p>土地集積をどのように図っていくか、それをどのように有効に活用して行くか、そのために必要な協力、連携体制を、さらに多くの事例を調査することによって、技術、経営の両側面から解析し、定式化する体系的な研究が現在の技術展開の実態を踏まえて行い、マニュアル化を図る必要があるのではないかと考える。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	<p>地域資源の利用という観点から、鹿児島硫黄島のチガヤの評価に興味があった。暖地特に島嶼、放牧という条件でのチガヤの再評価を検討してみるのも有効ではないかと考える。このほか愛媛や兵庫のシバ草地の利用による繁殖経営が評価されたことは国土利用のあり方として示唆に富んでいるものと考えられる。</p>
<p>4. 今後研究開発課題選択に当たって参考にするべき事項等</p>	<p>2. 3. 参照</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>入賞者はそれぞれ困難を抱えながらもそれぞれがそれぞれの地域に応じた創意工夫をもって目標とする経営を実現しており、そこには経営者の確固とした理想と哲学がかいま見られた。その楽天性が聞くものに感動を与えている。これを点から面へ拡大して行くためにはさらに技術、経営の面から解析し、又そのための施策を含めた条件作りが必要であり、それを一つ一つ定式化していかなければならない。一方、成功する農業者の条件、といった従来なかった事柄についても解析するというのはどうだろうか。</p> <p>点から面へのために何が必要か、この検討が今急がれるのではないかと考える。</p>
<p>報告者</p>	<p>太田 顯</p>